

[報告] 第 20 回歴史地震研究会に参加して

海洋科学技術センター 深海研究部* 松本 浩幸

Report of 20th Annual Meeting

Hiroyuki Matsumoto

Deep Sea Research Department, JAMSTEC
2-15, Natsushima, Yokosuka 237-0061, Japan

§1. はじめに

平成 15 年 9 月 5 日～7 日にかけて、第 20 回歴史地震研究会が開催された。千葉県佐倉市の歴史民族博物館および九十九里中央公民館において研究者向けおよび市民向けの講演会、そして九十九里海岸から房総半島先端部千倉海岸段丘の野外巡検という、ちょっとした移動距離のある内容だった。平成 15 年は、1703 年元禄関東地震からちょうど 300 年、そして 1923 年関東地震から 80 年を迎え、地震防災を見直す目的で地震に関連するイベントが各地で開催された。今回の歴史地震研究発表会が、国立歴史民族博物館で一部開催されたのも、地震、火山噴火、津波災害に関する「ドキュメント災害史 1703-2003」が同博物館で開催中だったからである。

私は今回歴史地震研究発表会に初めて参加する機会を得た。地震学会のニューズレターを読んでいて、シンポジウム案内の中で目が止まったのが参加したきっかけである。本報告では、私が全日程、研究会に参加して受けた印象・感想などを中心に書いていきたい。もっと具体的な内容や行動については、行谷さんの参加記を参考にされたい。

§2. 研究発表会の感想

研究発表会は、一日目と二日目で会場が異なった。一日目は佐倉市で行われ、一日目が終了後バスで移動し、二日目は九十九里町で行われた。まず強烈に印象に残ったことは、歴史地震研究会はすそ野が広く、地震学、自然災害科学、地質学、歴史学、文学等多岐に亘る学際的なコミュニティーということである。従って一日目は歴史津波と歴史地震の研究発表であったが、内容についていけないものもたくさんあった。私自身の勉強不足で全ての講演についてのコメントはできないが、いくつか印象に残った講演を挙げておきたい。

津波研究では、山下文男さんの岩手県田老の津波防災のための住民の積極的な活動は、明治三陸津波を契機とした自衛精神のもとに成り立っていること。産

総研の佐竹建治さん、七山太さん、北大の西村裕一さんたちが精力的に進めている千島海溝沿いの巨大地震の規模の推定に、北海道東部太平洋沿岸の史料が乏しいにも関わらず、津波堆積物が非常に強力で有効なツールとして使えること。

地震研究では、日本工営の今村隆正さん、井上公夫さんの金原明善が社会に貢献しながら活躍していくお話。これは紀伊国広村で後の津波防災のために身を粉にして堤防を築いた浜口梧陵に通じるものがあった。また、高校教諭の河内一男さんの歴史地震に対する洞察力や熱心さは、内容もさることながら研究に対する姿勢を見習いたいと思った。

二日目の会場は、房総半島の九十九里町中央公民館に移動した(写真 1)。九十九里沿岸は古くから鰯漁が有名で、お昼休みには地元住民により「つみれ汁」が研究会参加者に振舞われた。午後には、伊藤和明さんがコーディネーターを務めて、地元住民も参加する形式で市民講演会が行われた。防災関係者を含む 4 件の講演の後、伊藤さんの流暢な司会進行で地元住民の方々も参加でき、地元住民へのアウトリーチは成功した。めったに起きない津波の驚異を伝承することは、津波時の避難行動に役立つものである。房総各地に今でも残る津波碑は、犠牲者の供養に留まらず、津波から身を守る警告が刻まれたものもあるというのが印象的だった。私は、房総半島が過去に大津波に襲われてきたという事実を知らなかったので、市民講演会に参加して初めて知った事が多くとても勉強になった。

研究会参加者の宿泊先である「サンライズ九十九里」は、九十九里海岸に面した近代的なホテルであった。周辺に頑丈な建築物がないこの地域では、付近の住民は津波警報が発令されたらこのホテルに避難することを想定しているのだろうか。5 階建てホテルの地上 2 階部分までは空洞の構造になっている。海岸線から 10km 先まで高台がない地域において、津波からの避難場所を確保しておくことは重要ではあるが大変なことでもあったと感じた。

* 〒237-0061 横須賀市夏島町 2-15



写真1 研究発表を熱心に聴く参加者

§3. 巡検の感想

二日間の研究発表会に続き、最終日には「元禄地震津浪を現地に見る」という巡検見学会が開催された。元禄関東地震 300 年ということで、元禄地震津波関連の場所を見て歩くコースである。元禄津波の被害が大きかったことを物語るように、津波碑は九十九里町から東京湾の入り口に位置する館山市まで多く点在する。今回の巡検では、歴史地震研究会の開催地にある津浪碑を二つと天津小湊町の誕生寺にある津浪碑を見るスケジュールであった。

まず、ホテルを出発したバスは九十九里町真亀にある浄泰寺へと向かった。古い寺院で、境内の裏手に元禄津浪碑がある。碑面の文字もはっきりと読むことができた。次は、浄泰寺からバスで数分の大網白里町北今泉にある等覚寺へ移動した。道路脇に津浪碑が建っている。元禄地震津波がこの地域を飲み込み、多くの犠牲者を出したという証拠であり、改めて津波の恐ろしさを認識させられた。

続いてバスは、九十九里有料道路を南下して、一宮で小休憩した後、天津小湊町の誕生寺へと向かった。途中、房総半島の形成と成長に関する産総研の宍倉正展さんの解説も挟んで、距離ほどに時間は感じられなかった。誕生寺では、羽鳥徳太郎先生のご説明を受けながら、境内にある津浪碑、宝物館の見学を行った(写真2)。

誕生寺前のレストランで昼食をとった後、最後の見学地である房総半島南端の千倉町の海岸段丘の見学を行った(写真3)。宍倉正展さんの先導により、現在の汀線から陸側に向かって歩き、1923 年大正関東地震で隆起・離水した地形、そして 1703 年元禄関東地震で隆起した地形を見て歩いた。段丘地形から元禄関東地震時の隆起量が 3~6m であったと推定されており、それが沖合まで続いていると考え、確かに大津波が誘発されることは容易に想像できる。また、大正関東地震

との隆起量と比較すると、その規模が数倍だったことも、段丘の高さを直接体感する見学をしてよく分かった。



写真2 誕生寺において羽鳥先生の説明を聞く



写真3 関東地震で隆起した段丘群(千倉町)

§4. おわりに

歴史地震を共通キーワードとして研究される方々と三日間過ごして、ユニークな研究会らしいお話やとても貴重な見学会を経験させていただき、とても有意義な時間を感じた。私は久里浜に住んでいるので、帰りは金谷からフェリーに乗船した。夕陽に染まる房総半島を後に、満足した気持ちで帰ることができた。

今回の研究会にはJAMSTECからは私のほかに、平田賢治さん、馬場俊孝さんが参加していた。先述のように、歴史博物館では「ドキュメント災害史」が開かれており、お昼休みに各展示に携わった方の案内で見学した。その見学途中で佐竹さんから原稿の執筆依頼を受けていた。ご存知のとおり、9月26日早朝に十勝沖地震が発生して、各氏ともその事後対応に追われる日々を送ることになってしまった。したがって私が本報告を執筆することになり、随所に言葉足らずの所もあるがお許しいただきたい。また、研究会の準備に携わられた方々には、末筆ながら謝意を示す。